

# 日本スポーツ社会学会会報

Vol. 36

## *Sport Sociology*

### 【目次】

・日本スポーツ社会学会第13回大会のご案内	... 1
・海外学会報告 第2回国際スポーツ社会学会国際会議に参加して	... 5
・新刊紹介「社会学部ジャーナル」(龍論 RONRON)	... 8
・2003年度前期理事会報告	... 10
・編集委員会報告	... 12
・研究委員会報告(研究プロジェクトについて)	... 13
・事務局からのお知らせ	... 15
・編集後記/事務局住所/入会申込書	... 17

日本スポーツ社会学会  
Japan Society of Sport Sociology  
事務局 京都教育大学 2003年11月

## 日本スポーツ社会学会第13回大会のご案内

### 大会概要

期日 研究大会 2004年3月26日(金)・27日(土)

エクスカージョン 2004年3月28日(日)

会場 北海道教育大学教育学部旭川校 旭川市北門町9丁目

### アクセス方法

空路：旭川空港 旭川駅行き定期バス(約40分) JR旭川駅下車(以下JR)

新千歳空港(札幌) JR函館本線特急(約2時間半) JR旭川駅下車

JR：JR旭川駅 路線バス(約15分) 旭町2条10丁目下車 徒歩1分

北門9丁目下車 徒歩1分

タクシー：旭川空港 北海道教育大学旭川校(約5000円)

JR旭川駅 北海道教育大学旭川校(約1500円)

大会事務局では、交通・宿泊に関する斡旋は行いません。各自、旅行代理店のホテルパック等をご利用ください。詳細なアクセス情報については「大会ホームページ」をご覧ください。

参加費 正会員 5,000円(締切日以降は6,000円)

学生会員 3,000円

懇親会 4,000円

エクスカージョン 2,000円

大会事務局 北海道教育大学旭川校スポーツ社会学研究室内

Tel 0166-59-1342 Fax 0166-59-1209

E-mail maeda@asa.hokkyodai.ac.jp

URL <http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/maeda/index.htm>

### スケジュール 変更になることがあります

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
26日			理事会	受付	一般発表	特別講演	公開シンポジウム		総会	懇親会	
27日		一般発表	課題研究	昼食		一般発表					
28日		エクスカージョン									

**特別講演**：Andrew Brookes (La Trobe University Bendigo, Australia)

演題「Outdoor Activity in the Context of Nature and Society」

**公開シンポジウム**（予定）：

「北海道におけるアウトドア体験観光と地域振興 文化的葛藤を超えて」

**エクスカージョン「美瑛の丘・原生林スキーツアー」**

美しい丘陵地帯と雄大な十勝岳連峰をのぞみながら、原生林の中を歩くスキーで散策します。エゾシカの足跡をたどりながらキタキツネ、クマゲラと出会うチャンスです。歩くスキーは初心者でもすぐに楽しめます。用具はレンタルします。詳細については「大会ホームページ」をご覧ください。

#### ・大会参加・一般研究発表申し込み

大会に参加される方、研究発表される方は、期日までに以下の手続きにしたがって申し込みをして下さい。

〔申し込み手続き〕

綴じ込みの「第13回大会参加・発表申込書」に必要事項を記入の上、学会事務局宛に郵送、ファックスでお送り下さい。第13回大会ホームページから申し込むこともできます。

申込みと同時に、郵便振替にて大会参加費を大会事務局の口座までご送金下さい。

- ・大会参加・懇親会・エクスカージョン 11,000円（学生会員 9,000円）
- ・大会参加・懇親会 9,000円（学生会員 7,000円）
- ・大会参加のみ 5,000円（学生会員 3,000円）

締切日以降の申し込みは1,000円割り増しになります。

**申し込み締め切り 2003年12月20日（土）**

#### ・発表抄録集原稿の提出

研究発表される方は、抄録集に掲載するための原稿を以下の要領で作成し、期日までに大会事務局まで送付してください。

書式

- ・ A4用紙2枚、縦置き、横書き、1枚当たり40字×50行の2000字（論題、発表者氏名、所属を含む）で、上下左右の余白を20mm取ってください。

- ・ 論題、発表者氏名、所属を原稿の冒頭に入れてください。それぞれの下に英語表記を入れてください。

#### 発送方法

- ・ ワードソフト等を使用して原稿を作成し、プリントアウトしたものを、厚紙等で保護した上、郵送してください。第13回大会ホームページからも送ることができます。
- ・ 大会ホームページおよび電子メールで送付する場合は、Microsoft Wordで作成した文書を添付して送信してください。

送付された原稿をそのまま抄録集として印刷しますので、完成原稿をお送り下さい。

#### **原稿提出締め切り 2004年2月2日(月)**

期日までに提出されない場合、抄録集に掲載されません。

#### **・ 発表に関する注意事項**

個人研究の発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。

研究発表は発表20分、質疑応答10分です。ただし発表者数によって変更があります。

発表の際に使用する機器（プロジェクター、OHP、スライド、VTR）については、申し込みの際に明記してください。

当日、発表資料を配布する場合は、各自70部以上を持参してください。

#### 日本スポーツ社会学会第13回大会参加・発表申込書送付先

〒070-8621 旭川市北門町9丁目

北海道教育大学旭川校スポーツ社会学研究室・学会事務局 宛

Tel 0166-59-1342 Fax 0166-59-1209

第13回大会ホームページからも申し込みができます。

北海道教育大学旭川校スポーツ社会学研究室ホームページから入れます。

<http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/research/staff/maeda/index.htm>

#### 参加費振込先

郵便振替 □座番号 02760-1-40536

□座名称 前田和司

同封の振替用紙をご利用下さい。(手数料は各自ご負担願います)

支払者の連絡先を必ずご記入下さい。

## 日本スポーツ社会学会第13回大会参加・発表申込書

フリガナ 氏 名
-------------

会 員 の 種 別	正会員	学生会員
懇 親 会	参加する	参加しない
一 般 発 表	する	しない
論 題	研究発表者のみ記入	
発表に必要な機器	P C プロジェクター	スライド映写機 O H P V T R
エクスカージョン	参加する	参加しない
歩くスキー用具	レンタルする(身長	cm 足サイズ cm) しない

所属(勤務先)	
所属(勤務先)住所 〒	
Tel	Fax
E-mail	
その他連絡事項	

## 【海外学会報告】

### 第2回国際スポーツ社会学会国際会議(於ドイツ・ケルン体育大学)に出席して 海老島 均(びわこ成蹊スポーツ大学)

去る6月18日より21日まで、ドイツのケルン体育大学で標記の大会が開催された。通例として国際社会学会の分科会として開かれる国際スポーツ社会学会であるが、今回は2001年での韓国での大会に続き、2回目のスポーツ社会学単独の国際会議となった。今年のヨーロッパは猛暑で各地において記録的な高温が報告されたが、この会議開催期間中、既にその予兆が感じられ、うだるような暑さであった。一歩大学の外に足を踏み出すと、あちこちにタンクトップに短パン姿の女性や上半身裸の若者たちが自転車をこいでいる姿が見受けられた。

「スポーツと社会秩序と - 理論とその実践への挑戦」と題された今回の会議には、全世界から250名を超える参加者があった。地理的にヨーロッパからの参加が多いのは当然であろうが、発表者を国別で見ると、ドイツ25名、イギリス23名、カナダ10名に次ぎ日本からも9名の発表者があり、国際学会での活躍の一面と言えよう。またアメリカからの発表者が2名というのは、テロ等の危険からの懸念か、それとも彼らの発表の場が北米スポーツ社会学会の方に重点が置かれているのであろうか。

大会当日の3日間は毎朝9時より基調講演(20日には晩にも)が講堂であり、その後各テーマ別セッションに分かれて発表が行われるという形式をとった。テーマ別セッションは非常に細分化されており、最大で30人ほど収容の小教室で行われ、質疑応答だけでなく参加者同士の議論も盛んであり、活発な議論のための適切なスペースということについて考えさせられる経験となった。テーマ別セッションの主なテーマについては別表を参照して頂きたい。聞くところによるとケルン市はヨーロッパでも同性愛者の割合が最も高い都市の一つだそうで、「同性愛者とゲイ・スポーツ」に関するセッションはその面目躍如といったところであろうか。またケルン体育大学にはスポーツにおけるジェンダー研究に関連するスタッフが独立した建物で研究棟を持っているのも私にとっては少なからず驚きであった。そのジェンダー研究棟のスタッフが今回の国際会議の運営中心になっていたのだが、大会パンフレットに掲載されていた運営コミッティーのメンバーの写真(全員女性)は、ジェンダー研究所からの男性優位なアカデミズムの世界に対するメッセージのようではなかった。

会議は講堂でのオープニングセレモニーに続き、大学のカフェでの「ウェルカム・ビュッフェ」と題した立食パーティに始まった。クロージングセレモニーはケルン市中心部にあるオリンピック・ミュージアムで行われ、最後は「フェアウェル・バンケット」でディナーをとりながら大会の模様をスクリーンの写真で振り返ったり、運営委員会の労をねぎらう催しがあった。参加者同士のコミュニケーションを最大限に演出しようとした主催者の意図が強く伝わってきた。私自身も実に様々な国からの研究者と会話したり名刺を交わ

表. テーマ別セッションの主なテーマ

社会資本と階層	若者文化とスポーツ
エスニック・グループとスポーツにおける文化的差異	エリート・スポーツの社会的側面
スポーツクラブと組織的問題	コーチング場面でのジェンダー問題
ナショナル・アイデンティティとスポーツ	ゲイ・スポーツと同性愛論
スポーツ組織のジェンダー構成	ドーピングと逸脱行動
スポーツと身体文化	マスメディアとスポーツ
社会化とスポーツ	スポーツの経済的側面
傷害、痛み、ヘルスの社会心理学的側面	レジャー、ライフスタイル、スポーツ
スポーツにおけるファン・カルチャー	スポーツとコミュニティ
スポーツにおけるグローバル化の挑戦	

したりして、今後の情報交換や共同研究へのネットワークの可能性が広がったというメリットは大きかった。しかし日本人を中心に何人かの研究者の中から、運営を簡素化して参加費（今回日本円にして3万円強）を少し下げしてほしいとの声も多く聞かれた。

大会の使用言語は英語に統一されており、当然言語の壁を感じざるをえない場面もあった。例えば非英語圏からの発表がその国独自の現象の「紹介」的な要素が強いのに対して、英語圏からの研究者の発表は議論的部分により重点の置かれたものが多くなる傾向にあった。また発表方法に関しても非英語圏からの発表者はビジュアル・ツールによる工夫を凝らしたものが多く見られたのに対して、英語圏からの発表者の中には視覚資料を何も用いず約20分間話し通すものもいた。この発表者に対してはフロアから、「皆がネイティブ・スピーカーでないのでよりわかりやすい説明がほしかった」との苦言が呈される場面もあった。

最後に今回の会議で私が聞いていて一番興味深かった発表の内容に触れてみたい。この会議を最後に国際スポーツ社会学会会長から退くラフバラ大学のマグワイアー教授が『スポーツ科学とグローバル化の過程 社会的資本、支配、普遍性』と題してセッションで発表を行った。会場は入りきれないほどの人で溢れかえり、多くの参加者の関心領域であることをうかがい知ることができた。彼はまず最初に、世界的な「スポーツ化」の様相を特徴付けるにあたって鍵となる7つの「構造化された過程」に焦点を当てた。この構造化された過程というのはグートマンとロジェックの研究より引用されており、「世俗化」「機会の均等化」「専門化」「組織の合理化」「数値化と記録への挑戦」「民営化」「個性化」「商業化」「脱戦闘化」である。この構造化された過程により単一文化としてのスポーツが生み出されてきたわけである。そしてスポーツでの成功は、人的資源の利用とその識別、コーチングやトレーニング方法、スポーツ組織の能率性、スポーツ医学やスポーツ科学に対する知識の深さ、国際スポーツでのその国の位置付けに集約されるとした。体育という教科が

スポーツ科学と名称を変えていく過程で、パフォーマンスの能率性を追求する研究としてのスポーツ科学は、特殊なハビトゥス、非常に限定された身体文化の見方、狭隘な科学に対する見解を持つという危険性にもかかわらず、独特なスポーツ倫理という後ろ盾のもと発展してきた。その過程でスポーツ社会学に代表される社会科学的分野がスポーツ科学の周辺に追いやられたのは、ある意味では、自然科学系の研究者とスポーツ社会学者自らによって仕組まれた結果であるとした。

さらに世界的な規模のスポーツ産業が、国家的エージェント、多国籍企業、非国家的エージェント、スポーツ組織などの複合体から構成され、グローバル化の過程においてその複合体はますます巨大化しており、意志決定に関する民主的コントロール、透明性、説明責任などに対する要求はますます満たされないものとなってきている。スポーツ社会学者はスポーツ科学における位置付け同様、スポーツに関するポリシー決定において、ますます蚊帳の外に追いやられているという問題点を論証した。

彼はスポーツ科学の代替的概念形成を提唱し、その試みがエリート・スポーツに偏重しているグローバル・スポーツの世界において、ローカル・スポーツのニーズと地球規模の相互依存性とのバランスをとる手助けになるのではないかと議論を展開した。そして、これが現在出現しつつある新たな「地球的な秩序」に対する挑戦ではないかと締めくくった。この言葉が今回の国際会議の意義を端的に表現しているように思えてならなかった。優生学や遺伝子工学により人間の選別を強化したり、進んだスポーツ医学によりサイボーグ化した人間を作り出す技術は、スポーツ倫理を飛び越えて人間性そのものの倫理に対する挑戦である。人間や人間社会を全体像でとらえることのできる社会学、スポーツ社会学はその舵取り役として大きな役割を担ってきているわけである。今回の国際会議に出席してスポーツ社会学を研究する者としての意義を再認識することができた。



大会の受付ロビーにて。  
左から、黒須氏（福島大学）、  
リットナー氏（ケルン体育大  
学）、海老島氏（びわこ成蹊ス  
ポーツ大学）、鈴木氏（順天堂  
大学）。



## 【新刊紹介】

### 「社会学部ジャーナル」(愛称：龍論 RONRON)

亀山佳明(龍谷大学社会学部)

現代日本社会において、大学はかつてないほどの転換をせまられている。学生に対していかに魅力的なサービスを提供できるのかを、大学は問われている。こうした状況のなか、各大学は様々な工夫を凝らし、学部・学科の改編や、より実務に適したカリキュラムを持つ大学院の設置などの方策を行っている。

龍谷大学社会学部もまた 2004 年度に向けて学科改編(コミュニティー・マネジメント学科の増設)を行い、より多くの学生に向けて、彼らの実務志向に沿うカリキュラムを準備している。ただ、ややもすると、こうした試みはつねに供給者側の空回りになる恐れがある。一般企業をみてもわかるように、新しく開発した商品の売れ行きは、消費者側の動向に影響を受け、マーケティングリサーチの範囲をこえる不確定性をつねに孕んでいる。ゼロ・サムを競い合う経済競争の中で市場状況の読みを誤るなら致命傷を負いかねないのである。

しかしこの不確定性は、大学という教育機関にとっては、本来的に教育に何らかの可能性をもたらすともいえる。「生きる力」ともいうべきものは、決して数字に回収され尽くすことのない、不確定性の要素の一つともいえるからだ。

とすると、結局、大学にとっては学生自身がどのように学生生活の4年間を過ごすのが大学に対する魅力の要素となる。しかし、彼らの生きる力はやはり彼ら自身に内在するものであり、大学側はその養成の援助はできても、最終的に問われていることは、彼ら自身の生きることへの姿勢ということになるだろう。

こうした問題意識のもとに、龍谷大学社会学部学会では学生・院生を中心として 2001 年度より活動方針を一部変更し、年2回の事業運営と年1回の「社会学部ジャーナル」(愛称：龍論 RONRON)発行を行ってきた。事業活動はこれまで合計5回を重ね、ジャーナル発行は合計2回を数える。

事業の活動の中での企画立案では、学生たちがプレゼンテーションを開催し、教員によって構成される委員のジャッジメントを通過したものが採用される。その後の講師候補の選定や交渉、事業についてのアナウンス、教室や機材の手配など、すべて院生・学生の手でなされる。勿論、公的な活動であるため、単なる仲間内のサークルとは異なり、それぞれの責任の自覚が要求される。とりわけ講師候補との交渉などは、大学という枠を超えた「社会」との関わりあいであるため、細心の注意が要求される。

「社会学部ジャーナル」の企画編集においても、院生・学生が主体であることには変わりはない。記事の企画案提出や取材、調査、原稿の依頼、また雑誌全体の構成、レイアウト、校正、さらには印刷会社との交渉など責任をもって彼らの中の担当者が行なう。

2002 年度発行の「龍論」誌上においては、特集記事として、同年7月に行われた映画フ

オーラム「こどもの時間を考える!？」、11月に行われたシンポジウム「いま、スポーツは世界を語れるか？」を掲載した。

「こどもの時間を考える!？」については、第一部として映画「こどもの時間」の上映会を催し、第二部として、麻生武氏（奈良女子大学）、黒田末寿氏（滋賀県立大学）、著者を講師として三者による映画をめぐるディスカッションを行なった。ここでは、映画に描かれた、自然のなかでのこどもたちのいきいきとした様子が、現代日本社会にとってどのようなメッセージを発信しているのかが話題になった。

「いま、スポーツは世界を語れるか？」では、講師として井関真氏（日刊スポーツ 編集局員）、陣野俊史氏（明治大学講師、フットボール批評家）、スペル・デルフィン氏（大阪プロレス 社長兼レスラー）を招いた。こちらも二部構成になっており、第一部で各講師による講演を、第二部では司会者を交えたディスカッションを行った。

井関氏は、日刊スポーツ記者としての経験から、日本プロ野球界の裏話や、近年参加者が増えつつある高齢者野球、障害者野球などについて話され、陣野氏は、ご自身のフランス滞在期間における体験より、フランスサッカーリーグにおける人種差別問題、音楽とサッカーの関係などについて話された。スペル・デルフィン氏は、長年のプロレスラーとしての経験に基いて、プロレスの東京一極化の問題などの話題を提供された。第二部のディスカッションでは、会場にあつまった多くの学生・院生・教員からの質問を交えて、スポーツをめぐる様々な問題について議論がかわされた。

全体を通じて見てみると、2002年度はサッカーの日韓共催ワールドカップが行なわれた年でもあり、グローバル社会におけるスポーツが一つの大きなトピックとして浮上してきた。野球については、米国メジャーリーグと日本のプロ野球との関わり、サッカーについては、フランス代表チームに顕著にあらわれているように、旧植民地宗主国と植民地の関係を背景にした移民選手の排斥問題、プロレスについては、大阪という「地方」における興行の問題、などが主たる話題となった。

先に述べたように、これらの内容は、社会学部ジャーナル誌上に収められている。本誌に含まれるその他の内容として、スポーツに関しては、日韓ワールドカップにおけるフーリガン調査、西鉄ライオンズへの思い出などを綴ったエッセイ、スポーツ社会学のための文献一覧などがあり、バラエティーに富んでいる。いずれの記事も厳しいチェックを経過したものであるため、その完成度はなかなか高いといえる。社会学部学会の活動をより良いものにするために、われわれは「社会学部ジャーナル vol.1」を含めて、より多く皆さんに読んで頂きたいと考えている。そのことが、学生・院生の力をさらに引き出すことになると思うからである。希望される方には、原価（一冊¥1,000）でお譲り致しますので、下記の連絡先までご連絡を頂ければ幸いです。

#### **購入希望 連絡先**

Eメール journal@rnoc.fks.ryukoku.ac.jp

<社会学部ジャーナル vol.1or2 購入希望>と明記のうえ、<郵便番号、住所、氏名、電話番号>を記載して下さい。ご連絡いただき次第、担当者から返事がまいります。

## 2003 年度前期理事会報告

杉本厚夫（事務局長）

2003 年 9 月 23 日 於：京都キャンパスプラザ

出席理事：平野、森川、杉本、佐伯、菊、松田、山口、トンプソン、萩原、  
高橋（幹事）、前田（オブザーバー）

### < 審議事項 >

#### ・ 規約の改定

「これまで、スポーツ社会学研究を購読する会員である「購読会員」が会則に規定されていなかった。しかし、実際は大学図書館を始め、定期的に学会誌を購読する団体・個人が存在していた。そこで、今回、第 5 条及び第 7 条にその定義を明確にする必要がある。また、事務手続き等で会則を提出する際に会則に事務局の所在地が明らかなでないと効力を発揮しないことがある。したがって、会則の付則に事務局の所在地を明記する必要がある。」との事務局提案があり、審議の結果了承され、総会に附議することとなった。

#### ・ 会費について

- 1) 振込み手数料の振込み者負担について承認した。
- 2) 学会の発展的な運営のため、会費値上げの検討に入ることが了承された。

#### ・ 研究紀要の残部の処理について

研究紀要の残部が相当数あるので、大学図書館などへのセットの販売を行う方向で、検討に入るようになった。

#### ・ 平成 16 年度学会開催地について

会長、理事長、事務局長で調整する。

#### ・ 会報停止による賛助会員の扱いについて

出版社に限り、HP への相互リンクについて申し出があれば承認するが、バーナーは使わない。

#### ・ 日本学術会議の科研審査委員候補者推薦の承認について

上記の件について依頼があり、会長、理事長、事務局長で適任者を推薦し了承した。

#### ・ 日本学術会議の第 19 期会員候補者推薦（体育学・スポーツ科学研連）の承認について

上記の件について依頼があり、会長、理事長、事務局長で適任者を推薦し了承した。

- ・ **新入会員の承認について**

下記の7名について入会を承認した。

属性	氏名	所属	推薦者
正会員	渡辺保	新潟県立糸魚川白嶺高等学校	杉本厚夫
正会員	Notter David	慶応義塾大学経済学専任講師	黒田勇
正会員	井戸聡	愛知県立大学	沼尻正之
学生会員	市井吉興	立命館大学大学院社会学研究科研究生	山下高行
学生会員	市川了輔	立命館大学大学院社会学研究科研究生	山下高行
学生会員	新雅史	東京大学大学院人文社会系研究科(社会学)	澤井和彦
学生会員	前田貴司	大阪外国語大学大学院生	杉本厚夫

**<報告事項>**

- ・ **編集委員会から**

別紙 12 頁 参照

- ・ **研究委員会から**

研究プロジェクトについて(別紙 13-14 頁 参照)

平成 15 年度学会大会について(別紙 1-4 頁 参照)

- ・ **国際交流委員会から**

韓国との研究交流について

- ・ **ホームページ委員会から**

7 月から <http://jsss.jp> にホームページを移行した。

旧のホームページは今しばらく開いておき、そこから、新しいホームページに飛べるようにしてある。

- ・ **事務局から**

別紙 15-16 頁 参照

## 編集委員会報告

菊幸一（編集委員長）

### 編集委員会の構成メンバー

- ・編集理事担当...菊（委員長） 佐伯、亀山、萩原
  - ・担当理事以外...海老原、挾本、黄、トンプソン
- （なお、庶務関係については、アルバイト雇用の形で東方会員に依頼）

### 編集状況

- ・5月24日（土）...第1回編集委員会（編集方針、審査手順、理事以外の編集員選出、印刷体制等）
- ・9月6日（土）...第2回編集委員会
  - \* 投稿論文数 - 10本（教員3、院生7）
  - \* 1本の論文につき、主査（編集委員）1名、その他の査読者2名を決定
  - \* 現在、1回目の査読を依頼中

### 特集論文、書評等について

- ・特集論文
  - \* 岡山大会の Manzenreiter 氏の特別講演、および公開シンポの3名に依頼。いずれも、現在交渉中だが、諾否によって特別寄稿の形に変更予定。
  - \* 研究委員会のテーマ企画についての取り扱いについては、松田会員に依頼。
- ・書評論文
  - \* 次回編集委員会（10月11日予定）で検討。
  - \* 理事からの推薦も歓迎。
- ・業績一覧については、会員の過去1年間の業績をリアルタイムで紹介すべく、なるべく1年単位の業績を毎巻掲載することとする。但し、12巻のみ、これまでの未掲載者の分を含め、複数年にわたって掲載することとする（例えば、2000年以降）。

### 広告について

- ・前号掲載の5社（杏林書院、不昧堂、世界思想社、創文企画、大修館書店）に依頼予定

### 年2回の編集体制について

- ・年2回の編集の可能性について、会費値上げの動向を踏まえながら、編集委員会で検討していくこととなった。

### その他

11巻掲載の「研究ノート」に関する文献追加の取り扱いについて（経過報告）

## 研究委員会からのお知らせ ～研究プロジェクトについて～

松田恵示（研究委員長）

前回の会報で会員みなさまにお願いしておりました、今期の課題研究のテーマにつきまして、いろいろなご意見をいただき、まことにありがとうございました。研究委員会で検討いたしました結果、今期は次の2つの課題研究に取り組むことにいたしました。そこで、この2つの課題研究の参加者を募集いたします。

今期の課題研究につきましても、前期同様に、今年度と来年度の2年間を研究期間とし、学会大会におけるセッションの開催と研究誌における成果の報告を行います。単年度の研究経費が1課題につき10万円の配分ですので、課題研究の進め方にもさまざまな制約がありますが、関心をお持ちの会員みなさまの御助力をいただけますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、この件へのお問い合わせ、応募につきましては、2003年12月14日(日)までに、以下のところに、Eメール、もしくはFAXにてご連絡下さいますようお願いいたします。研究内容の具体的なお問い合わせにつきましては、それぞれの課題研究担当理事に直接Eメール等にてお尋ね下さい。

E-Mail : project@jsss.jp

FAX : 086-251-7666 (岡山大学教育学部 松田恵示研究室)

また、研究の運営が難しくなるほどに多数のお申し込みがありましたときには、研究委員会の方で人選させていただくことがございますことを、あらかじめお含みおきいただきますようお願い申し上げます。

### 課題研究(1)

**テーマ：「スポーツ・ドキュメンタリーをみる」**

担当：リー・トンプソン thompson@waseda.jp

本企画ではスポーツ・ドキュメンタリーをとりあげたい。スポーツ・ドキュメンタリーといえは1936年のベルリンオリンピックを題材とした、レニ・リーフェンシュタール監督の『オリンピア』が有名であろう。その芸術性が高く評価されながら、ファシズムの

宣伝という批判も受けた。つまり、ドキュメンタリーを語るには、様々なレベルでの分析が可能である。内容、作法、イデオロギー、社会的背景など、アプローチは多様であり得る。

今後の2大会においてそれぞれ一本のドキュメンタリー映画を鑑賞し、それについてディスカッションを行う。第一回目の作品は、2002年12月にアメリカの公共放送PBSで放映されたものを取りあげる。関心がある会員はご連絡下さい。可能であれば、大会前に数人で試写会を開き、当日のディスカッションに備える。また、取り上げたい作品があればご紹介下さい。

## 課題研究(2)

### テーマ：「スポーツとことば」

担当：松田恵示 matsuda@cc.okayama-u.ac.jp

本企画では、「ことば」を視点としたスポーツ社会学について考えてみたい。20世紀の科学的発見の1つに「言語の発見」があげられる。スポーツ社会学という営為や、私たちの日常生活におけるスポーツ場面を考えてみても、これらの行為はすべて言語を通じて成される。さらに言語は、単なる伝達手段や道具というのではなく、それ自体が意味や新たな認識を産み出す、つまり社会的現実を構成する当の実践そのものである。この意味で社会的な現実の構築とは、言語的な現実の構築と言い換えてもよい。

ところがスポーツを対象に、そうした「言語論的」社会学をふりかざしたとき、いくつもの違和感を持ってしまうことが、本学会でもたびたび報告されている。スポーツに対してと、スポーツからの社会的認識である。そこで、本企画ではスポーツと言語という問題について、スポーツ社会学ではどのような問い立てが可能なのか、またどのような種類の知見を産み出すことができるのか、その可能性について、参加会員の固有の関心対象から共通して探っていくことを課題として進めてみたい。

## 事務局からのお知らせ

杉本厚夫（事務局長）

### 会費納入のお願い。

現在の会費納入状況は下記のようになっております。

会費未納の会員の方は、下記の所に至急納入いただきますようお願い申し上げます。

郵便振替口座：日本スポーツ社会学会 00390-0-43962

#### 2003 年度会費納入状況（平成 15 年 9 月 23 日現在）

	会員数	納入者数	納入者割合
正 会 員 5000 円	301 名 (新入会員含む)	165 名	54.8%
学 生 会 員 3000 円	92 名 (新入会員含む)	36 名	39.1%
購 読 会 員 3000 円	1 名 7 団体	1 名	12.5%
賛 助 会 員 20000 円	3 社	3 社	100%

### メールマガジンのためのアドレス通知のお願い

事務の電子化に伴い、会員の皆さんには今後電子メールでご連絡申し上げることが多くなります。とりわけ、緊急を要する情報の発信は電子メールで行いたいと思っております。また、会報もホームページ上での発信となり、それらの状況も電子メールでお伝えします。

しかし、現在、会員の 3 分の 1 のメールアドレスが未登録です。また、事務局にメールアドレスを登録されていない方、あるいはメールアドレスが変更になった方は、至急、事務局（secretary@jsss.jp）までアドレスを報告してください。なお、正しく登録されている方には、今回の会報が届く前に、事務局から会報に関するメールが届いているはずですが、

### 会員名簿

会員名簿を作成しましたので、同封します。

ご確認頂き、誤り、変更等がありましたら、事務局までメール（secretary@jsss.jp）でお知らせいただきますようお願い申し上げます。



## 住所不明者

下記の方のご住所が不明です。ご承知の方は事務局までご連絡下さい。

浅川重俊 伊藤嘉樹 浦田八千代 浦和俊介 江口潤 大谷昌子 金春愛  
合田尚樹 児玉克哉 重村敦司 清水一巳 清和洋子 瀬尾恭子 武重雅文  
鄭守皓 角田聡美 Dylan Weston 中島弘毅 中川敏子 橋本政晴 松井晋右  
松村雅代 Michael Ehrenreich 安永智和 湯川照代

## お詫び

前回の会報でお知らせしました総会における決算報告と予算書の記載にミスがありました。謹んでお詫び申し上げますとともに、訂正させていただきます。

### 決算書

	誤	正
差引残高	172,973	172,963
1.収入の部		
利子収入	83	74
2.支出の部		
事務局作業費	8,092	7,462

### 予算書

	誤	正
2.支出の部		
予備費	104,530	259,530

## 会報のペーパーレス化

すでにこれまでお知らせしてきましたように、今回の会報をもちまして、紙媒体による会報の作成は終了します。次回からは、ホームページ上でのPDFによる会報の発行となります。また、発行に際しましては、メールでお知らせいたしますので、まだ、メールの登録をお済でない方は、至急、お知らせいただきますとともに、メールアドレスの変更が生じた場合は、速やかに事務局までお知らせいただきますようお願い申し上げます。

## 編 集 後 記

今秋から、編集を担当することになりました。初めてのことで、編集ミスがないか不安です。どうぞ、よろしく願います。耳寄りな情報（新刊情報、海外研究通信、海外学会報告、研究活動通信等）を、どしどしお寄せ下さい。会報が有用な情報を交換する場となればと思います。この号で、紙媒体の会報は最後となり、次号の会報からホームページ上の発信となります。これって、クールなメディアへの変化でしょうか、それともホットなメディアへの変化でしょうか。情報精細度の高低は？ 単一感覚か全身感覚か？ 補完度（参加度）の高低は？ ... あまり変わらないと思いますが、高張らなくなったことは確かです。でも、プリントアウトすれば、同じですね。（H.T.）

### 学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒612-8522 京都市伏見区深草籐森1 京都教育大学気付  
日本スポーツ社会学会事務局 杉本厚夫【事務局長】  
TEL: 075-644-8283 FAX: 075-645-1734  
E-mail: [secretary@jsss.jp](mailto:secretary@jsss.jp)  
(郵便口座番号) 00390-0-43962  
(加入者名) 日本スポーツ社会学会事務局

### 会報への投稿

〒630-8528 奈良市高畑町  
奈良教育大学  
高橋豪仁【会報担当】  
E-mail: [doc@jsss.jp](mailto:doc@jsss.jp)

### 学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ  
<http://jsss.jp>

# 入会申し込み書

( 事務局へ送付願います )

ふりがな 氏名：	会員種別（どちらかを で囲む）  正会員 ・ 学生会員
紹介者： ( 推薦人 )  必ず記入して下さい	専門分野：
勤務（所属）先：	
勤務（所属先）住所： 〒  TEL： FAX：	
自宅住所（ 記入は任意です）： 〒  TEL： FAX：	
郵便物の発送先（どちらかを で囲む）  勤務（所属先）住所 ・ 自宅	
E-mail：  ( _____ @ _____ ) 必ず記入して下さい	